

「伝える」ということ - そして明日へ -

著者	丸山 良子
雑誌名	東北医学雑誌
巻	132
号	1
ページ	13-14
発行年	2020-06
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132136

—— 最 終 講 義 ——

2020年2月7日：医学部百周年開設記念ホール 星陵オーデトリウム講堂

「伝える」ということ—そして明日へ—

東北大学教授

丸 山 良 子



略 歴

- 1980年 千葉大学看護学部看護学科卒業
- 1988年 千葉大学大学院医学研究科博士課程修了
- 1990年 労働省産業医学総合研究所労働保健研究部研究員
- 1995年 北海道医療大学看護福祉学部助手
- 1997年 宮城大学看護学部助教授
- 2002年 広島国際大学保健医療学部教授
- 2003年 広島国際大学大学院看護学研究科教授
- 2005年 東北大学医学部教授
- 2008年 東北大学大学院医学系研究科教授
- 2020年 退職

— 最終講義 —

「伝える」ということ — そして明日へ —

This is What I Want Tell You the Most

丸 山 良 子

看護アセスメント学分野

2020年3月をもって15年間を過ごした東北大学を退職することになりました。この15年は開設直後の保健学科、大学院開設、2011年の東日本大震災と何かと大変な時期でしたが、卒業生や大学院修了生の成長とともに過ごすことができた年月で、この上なく幸せな日々でした。

私は長野県の松本で高校まで過ごしました。長野県はよく教育県と言われます。何をもって教育県なのかは良くわかりませんが、私自身、男女を区別されることも、両親から何かを強制することもなく伸び伸びと幼少期、学童期を過ごしました。千葉大学看護学部卒業後、同大学大学院医学研究科第2生理学教室で呼吸の化学調節機序の評価に関する研究で学位を取得しました。当時、私が在籍した第2生理学教室は、本田良行教授と福田康一郎助教授が精力的に研究を行っており、臨床教室からの大学院生が多数在籍し、海外の研究者もおり、誰もが国外に出て学ぶことが普通の世界に開かれた研究室でした。この環境で研究指導を受けたことが、私の現在の基礎となる部分を構築してくれたものと考えています。低酸素時における呼吸の調節メカニズム、低体温時の酸素運搬に関する研究が私の主な研究テーマでした。ラットのsinus nerveから神経活動を測定する実験は、難易度が高く大変でしたが、測定できる研究者がほとんどおらず、内容と技術を評価されました。大学院修了後、3年近く第2生理学教室で研究を続けましたが、縁あって労働省産業医学総合研究所に移動し、大気環境中の汚染物質が呼吸器や循環器に与える影響評価の研究に従事しました。ここでは、他施設にはない大気環境物質の曝露実験を経験できました。研究所在職中にも米国で研鑽を積む機会に恵まれたことも幸運でした。

1990年代は、全国各地に看護系大学が多数新設された時代で、大学時代の恩師の勧めで看護系大学教員になりました。研究所から大学の教員になる際には、研究所の恵まれた研究予算を考えると迷いもあったの

ですが、今はあの時の選択は間違っていなかったと思います。1997年に新設された宮城大学看護学部の助教授就任が、仙台に住むようになったきっかけでした。ここで本格的に看護技術教育に携わるようになり、宮城大学設立当時に一緒に働くことになった先生と生理学や解剖学の知識を基盤にした科学的思考に基づく看護技術教育を行うにはどうしたら良いか、教育方法を考え、議論したものです。2002年に広島国際大学保健医療学部大学院設置のため、3年間広島に居を移し、西日本の文化に初めて触れました。方言や味覚の違いは面白く、初めて原爆が投下された広島市の生活は、またそれなりに感じる空気が異なりました。東北大学に着任前に経験した医学部、国立研究所、私立大学と公立大学の看護系と異なる施設での教育、研究の経験は決して無駄になることはなく、東北大学での仕事の糧になりました。異なる施設や大学の経験は、自分の持つ価値観だけでなく、多様な価値観を認めることに繋がったと思います。

2005年東北大学医学部保健学科教授に就任し、再び仙台に戻りました。2008年、医学系研究科大学院保健学専攻が開設され、大学院生の教育が始まりました。開設当時から現在まで、呼吸・循環生理学的な知見に基づいた、看護技術のエビデンス構築に関する基礎的研究やクリティカルな状況にある患者の看護援助に関する研究を通して、多くの卒業研究生と大学院生の教育に関わったことは、私の最大の喜びです。着任当初、ほとんど何もなかった研究室から、多くの卒業生と大学院修了生の努力により、私が目指したいと考えた看護技術のエビデンス構築、臨床で行われている患者ケアやアセスメントの発展に寄与できる研究の一翼を担えたのではないかと考えます。2007年に東北大学保健学科に初めて入学した皆さんが4年生になり、卒業研究が始まりました。当時の研究がその後に続く分野の看護学研究の走りとなり、先輩から後輩へと引き継がれて現在の分野の発展をもたらしてくれま



した。自ら考えて変化をもたらすことのできる能力を持った卒業生と大学院生修了生に恵まれたからと、感謝の気持ちでいっぱいです。研究成果は今日すぐに役立つかもしれないかもしれませんが、いつか誰かのためになれば良く、そんな仕事に誇りを持って欲しいと思います。

日本だけでなく、世界は今、気候変動や環境の悪化、感染症の脅威など多くの健康問題にさらされています。成長した皆さんの今後の活躍と社会貢献が楽しみです。

私の東北大学医学部・医学系研究科で過ごした 15

年の成果は、他大学ではなかなか難しい他分野との研究協力のしやすさ、いつも快くご支援をいただいた多くの先生、そして一緒に頑張った看護アセスメント学分野の菅野恵美准教授と丹野寛大助教のおかげです。

私を支えて下さった多くの皆様のご援助とご指導に心より御礼を申し上げますとともに、皆様のご健勝とご活躍をお祈りしています。

東北大学医学部・医学系研究科の益々の発展を願い、最終講義といたします。